

911.3
7
下

清江先生集

下

雪の降旅路可風
景北

能くもふらぬく川之神宮月

鶯の糞くく色ふかき神宮
成美

音のぬきも阿もくく色を

十の揚や林やゆふの降まふ

けの袖かきくりかたの波
長翠

もかき川雪舟押さるる流もり

あまひのかくまて居る存の心

かきと柳うきりかや堂

小夜子きあや局の心見
保吉

會津山中

人きく雪く草依ふもく心
堯景

山の草色を構と見も草中
樗堂

芭蕉公肖像眼

眼を寝を寝く紅糸ふり
蝶美

病中

冬丸けや也の上穂を
白雄

ふらり来て二の
久居

米沢七人

千の墨の白のあかりり水なり
尾羊

見きり雲の縁にわたり冬のは
長家

けしき菜世にわたり春のうら
河道

松尾の枝の柳かまなりり
松更

雲の影ぬるるのや
太二

日のまは枝より霞のあはれ
和恨

何れ道もふりちるや
雄鳥

日世にわたり月より霞なり
ふ河

水のこぼれ霞のあはれ色め
旭山

麦のやち日おをるる松の影
宇工

指替をゆへ甲斐のりゆ不
十竹

降雪のたもとまはち
桂枝

雲のまはち月もかきむら
画巻

山系をち構もさるる日の白
赤糸

十月中旬を焼きたる日
江戸

二かしのまも板の
麦洲

おしきの二おはるる吹流る
護物

あはれりり
蕉扇

人無かくて海探ぐ

江ノ
君交

るかこころくや

枕生

鯨の落し

幸雄

和歌抄

九折

鯨の面

道度

時雨

鳥

冬

き

月居

こころの

武良
五十二

うしろの

柳好

上野

蕙

上毛
一様

奥

魏承

楳

志盛

ふん

川二

白川

信良
白高

お

坂道

四方のしきのちほるや三よひ

江呂

鳥頂

志くもくやあつていふ魚の骨

京

杜若

野の苗を埋む木の葉や冬のた

尾呂

足彦

行くもよそのもちある花もふが

三呂

卓池

星をていひもさす一語の鈴

肥前

そめ

この結ぶ時をさす真由堂

大坂

三浦

何よりも哀大や一をぬもり

行くや梅ふるさつを菴の健

井眉

大雪もさふさふとよの雪

河内

来麩

山雀の鳴き声は枯野うら

下サ

若菜

梅の裾にかけふる花もふが

ムツ

松竹

山道へゆめを思ふやぬく免る

乙女

松前より富嶽へまゐる早瀬を越ふ

紅葉をさす花も梅の香かきり

結ぶハ言ザ一かえりそめ

母の戸物子達の声の月ももふ

米沢

曉花

ゆの月あつての月もさす千も

志菜

軽垣や何れも声の降消子

巻久

茶代りし重なる山物 紅葉ふちふ

米沢

赤白

紫戸もふ月もく過しと実成

龜暎

栗田もきりし後ふ秋の色

桂路

君の代やももぬもは秋の雪

志省

ものまいた風の吹きり冬木之

盤山

松見りしは秋風ぬ秋風の風

樹得

霞りもきりしは秋風ぬ秋風の風

振ふ

篠りし降雪の声きり菴可那

文波

指の心すの秋きり唇也は葉も

珂洲

分別の外の景色や草の色

山色

指もくや秋の色きり影もきり

日影の傍の秋もは秋野也

雲岩

花もぬき日七廿七日午時也

泣事りの振かきりし秋もは秋

古翠

夕の霞も秋もは秋の田也

曉花

山吹の先もは秋もは秋

杜橋

その雪もは秋もは秋

白鳥

あはれもは秋もは秋

曉花

木下りや昔あつしの山の家

米沢 兼休

松栢の蔭に坐すも水かすまのこけ

水に流るるもくもくもや時を留

見返すに時あり日あり古 曆

仙耳

夕影の蔭をこもるもその蔭をみ

仙耳 仙遊福二句

月影も思ひをかきこきこし後

仙耳 兼休

もくもくも昔あつしを月影に

圭高

乾鮭や管きぬとのと見るとみ

井久

紫の戸や花忍くもくもくも居

をわすめの入江に流るるもくも

指月

海士うみのその書影や雪に白く

梨曉

りし月のもくもくもくもくも柳をみ

うねり

乾鮭の歯をくもくもくもくもくも

大逸

足えくもくもくもくもくもくもくも

左橋

唐菅千一 時をくもくもくもくも

乙鳩

時をくもくもくもくもくもくもくも

扇柳

嵐等ハヤシク 柳影をみくもくもくも

古翠

口切やまはるく 祿子居て 隙

米沢

飛巻

森舟も 敷く言ひく 花の葉も 風

乙韻

小舟の 長風と 後さしを 舟ぬ

雪の 物や たり 可み ねを 結心

道彦

折る 竹も 薄し あり 結み くの 梅

梅の 花も 通す あり 梅の あり 樹

碓嶺

ふの 仙も 切ふや 大さすの 墓系

藤原

枯ふと 草子 あり あり あり あり あり

素来

山雀の 手 通く あり あり あり あり

かとり

雪の日や 施米の 大 けのこ

山幸梅

かゝる 鳥の あり あり 鳥の 雪の 降

池原

池魚の 災子 あり あり あり

琵琶 瓶の 雪 降り あり あり あり

乙二

ふの 仙も 止 齒 あり あり あり あり

小坊 主の 仙 あり あり あり あり あり

高知の 里

館 色 あり あり あり あり あり あり

道の あり あり あり あり あり あり

道彦

春を待指の果やつくまふ

碓嶺

身はまゝ外に風かゝり街ゆく

^{米沢} 疎竹

森く身の穴もさかすや冬の風

春二

山のの露を仕舞ひし雪の降

^{七人} 素人

とふゆて見ても思ふに除衣の鐘

乙二

有明の月より春の中とまたり

巢兆

手暮ぬ市に住まゝ明石の湯

葛三

天津石二日の短きも限りのか

葛三

春の門より春はみえたり音

士朗

あ居るりの門の裏やあく桂

碓嶺

朝日夕日のおる後長く頃

疎竹

玉鉾の市の中より春まゝ

嶺

腰の扇を折ふ来山

竹

既望ハ秋まゝ遠の国へし

嶺

一帯の杉を一本に焚く

竹

きのふ見よるは遠く秋まゝ

竹

延齡ふもり情とくを

嶺

二十年後を見ぬとて位とて

竹

定家の妻の社家と身を下

嶺

推の實の落るるも月とて

竹

兔の稻子通ふ所はさく

嶺

一貫の鈔を筆すふやとて

竹

信西の信の人強ひたる

嶺

附の習子を見ぬは三時越

竹

志とて浮き出て雲白作る日

嶺

嶺とて雲ふも中へ茶の香

竹

地と保くしの変りせり

嶺

思ふまゝとて知の神楽見せし

竹

ハ童の従東の若は言きと

竹

朔日の夜はしりし竹とて

嶺

鏡の裏の画も志のふ

竹

紫陽をよせ世のそかきとて

嶺

海とてふるすは日とて

竹

とちのくの道をたふさふ日

嶺

松の耐る雪さうふ 声

竹

遺經を洞流しきり解きりふ

嶺

一人重岩に降りふ巖六

竹

あやくしとまもるは山嶺の月

嶺

北の庵をのりて 結ぶる手

竹

院中を往きて 秋や情し

嶺

切まじく 糸珠敷を繕ふは

嶺

さうくと 白暮をるの 博せり

竹

指のきりふ 凡のそまきぬ

嶺

知り 堀山のまき色の花 咲き

竹

心うけ 物さふ子に 抱ふ春

嶺

雲る 田無形

人の冬のみさふ 月干 乾く 紅葉ふ

確嶺

月をさす 月をさす 山の端

志葉

花 瓶の先より 秋を通や

瓶

夏 彼よの 菘菜 中ゆふ

寺久

黄鳥のほりく 赤き 新を

赤翠

河一木の柳春り連ひつ

亀暁

葎入のちあまの途をほろかりを

山水

佛の花を赤牡丹出

牙比

御之更子船ハ七尾と管計系

雲牛

入松千千と世の情あつた

桂路

暮暮家日もぬる月も思路や

雀水

三島のあつた月を待身取

冬色

小舟秋さく際中を揺るに

樹得

二寄りぬきつふあつた

寸呂

言るうう歌のあつた皆叶ひ

火逸

招の苗を神ふ初ふ

赤白

敷の道もをそぬ木曾の谷

吟歩

風や清きうらもゆるゆき

う橋台

正月のまふしのあつた御殿

圭高

志の初あつたあつた

又波

旅やう浪も碑きり思ふ頃

志者

後の口もほろく雀の餌

吟味

けいこつとく来り居春を待た

狂摺

位子の母の齒乃余りかろし

杜殿

板妻の釘の浮く家西お解ふ

峰山

雲鳥のおまゝ白作之巫子

涉香

葉の根を分る子えり月示成

扇柳

二人の刀およりしをさほ

柳史

子海ももあそむ位を道子母

乙野

云くと傾くちれいのも

丹丸

五りゆの色色もさし東野也

李翠

黄波小結のし菴了悔史

栗律

飛鳥の森や紅をのそやと中家

鳥左

伝葉しし手標を継ぐは

白吏

小笠ふく風も接しはも道子

曉花

鳥名三月のそふを洞子

左耕

乙二りややく年あもとまひ

しも昔やありき今年こあ

中羽り居てしちのく燕し吉野巾

碓嶺

秋あり隊りし写はるの梅子

忍雲

炮 後くの上より跡より水溜を

山嶺

夢の中迷ふの餅をまぐ

山嶺

まき山の色よりささくささく月

山嶺

花より阿中より舟の御寒

山嶺

手拭の藍の白のり 風吹く

山嶺

尼ふあふ子りかたの中を焚

山嶺

眼よりささぬ情を山風は聲

山嶺

夢事まひたまふとさふ

山嶺

奥細ふ赤車子浪もたのふ

山嶺

籠 海へゆふ雨ふる冷つく

山嶺

粟稗も早み替らけそ日出て

山嶺

鳥 菰のうのあかき世り

山嶺

金沢の道も教ふささく

山嶺

暮 子名あつ 袂中く

山嶺

長 松のささ物ささく花の陰

山嶺

丸 樹の土も春ふり

山嶺

子の子の交信つの子をねねの
確嶺

お目のまがぬ麻手は食
不找

黄鳥のむろく宙に散落す
嶺

春尔中々きし此の後の月
嶺

種おそは水の秋をとかぬ着る
找

訳の猿のききしりぬ福ふ
找

降るのふれきふる夏のそく
嶺

ふやふ鏡子船のふさ
找

志しるる身ハ生計の星の松
嶺

電掣し出さる臨 休日
找

あふふの播を買ふ行を戻り
嶺

秋をちるし母不破の記書し
找

一巻ニ巻くしきり日なり雁
嶺

市の飯をのし書をする
嶺

鯉 けふ中々かきし悔る者
找

ふねの流子の流流をくむ
嶺

後 柱を玉もまぬぬ花の後
找

花の赤なる葉の紅なるを 秋の月夜 ムツ 竹二

あゝ草ふゆふゆめをささぐ 虫の音 かつ

黄なるの玉ふぶ里や 相替なる 五十五 松年

雲のあつた 陽のうらむと 家梅うら イセ 省吾

るな 賞なり 初ん 牡丹のちり 春日の たれ上 瑞元

まののきく 松のトミと 有のり イセ 涼居

隔のあや 松の葉の 枯もせ 秋泉

秋風の柳ふぶくや 真如堂 清美

庭のきく 松の葉の 山のぼる イセ 民時

山吹の赤く 見ふそをさあ の 雪 イセ 文貫

あゝあゝ 桐の末さき 玉取可ぬ イセ 晴高

松風の音ハ 青の葉の 何ぞの風 イセ 平明

庭前 年経ふ 松を 枯る イセ 感涼

照るの もそ 夕 影も 老の 春 イセ 久思

く 枯や 山 雲の 尾 風さ かく イセ 左洲

あゝあゝ およ かり 程の 雨 燕 イセ 左洲

十時菴

秋 待ん 志の 水 千 古 世の 木 花 イセ 確嶺

旅うつろふ意もさす後の墨田川

江戸 護物

古里一盃しりしめさるも草枕

碓嶺

風越をとりほく雪の野山あり

蕉雨

地帯の舊日をさしや新し子

掌笠

十六日夜の明てきなるゆふ子哉

乙二

川舟の禰男ふやしらを

静なるを画す見たる一福祭

二十一日思をほく新年の良夜

二夜あり月をみまをさくふ好近

附の百毛不しまねくや附多

葛三

氷はくも目か交るはく丘の松

舟のくさみ散を見そや墨田川

道彦

黄のきの摺餅を食はく宿あり

泉兆

さら雪や笑の清みの理もし

形もすあま小松をさしや写御

枝葉の月を妻帯や珠々富

麻並

掌も花さくやふ届うぬをの上

ト之

三日月の影を秋あし一の色

芸智

米沢

芳代の本草も人も甚き思ふ

米沢 忍雲

〜の流も汲す

〜の流も汲す

大系や大根喰の雪のくも

芦洲

精ちふ友平一居妻子性うれ

左明

本枕の三河もあつてむの岩

世見え

草芥のさうさうはふむのまう柳

太橋

寺甲や牡丹竹日の天施多意

頂下流名半中さう見し春の夏

東海

梅さうや木を割者の割して

盤山

苗云物一草本平一苗を枯せ墨

多み宿のさうさう梅をいし流を梅く

芳休

雪何し色むゆふ日日もあかりを

見ぬ先のさうさう思ふや松の霜

戎比

高平ぬさうさう声何り戸の板平を

士峯

鮎の流の一版多あり文一雲

松徑

有流さうさうさう流多きし流多き

岩崎千鶴の人の誰か手の暮

米沢 杜馬

十六日おや 瓜先くま山の早

又董

すく晴も世すく香もほや 草の宿

司曉

寒月や 霞のよそふと見

素英

石化窓すく心あのを 笑ふそ

秋 一海

玉の雪すく 衣とめり 新 朗

魯風

下京や 茶 畑の中の 聲 びも

朱唇

よの露も ねに 顔ひく 草 中く

兔考

炭 扱くも ほ みのく 色の 先 心

不我

江中すく 花 魁す 降 やすくの 句

もとの

妻 中心すく 暮すも 日 初る 向ふ 山

蓬石

降 霜も ころも 色 かな けり 山 檜

乙人

男 小なり 先の とも せや せう 時 而

古翠

煙 糸 窓も 香す 三 睡の 文も 本を

橋秀

山 心くす 草 子 見す けり 女 花

雄鳥

霞 小の 何 中 家 種 風 色 雨 り 也

とく

江戸年寄

野草の 露 たり 雨 空 後 代 の 春

李翠

夏神をみまごまをり山をり

米沢 宇喬

花露の日に終くうまふ夕

田代

市販の秋も白ひ山椒の芽

素律

かき草や牛の背よりなくゆきの影

かゝ里

あまふ子と芦留はくまを以自祝

琴利

ねの海に月返ひ山をりけり

権秀

あまふハ洋よりとほも秋のそら

虹山

甲子年の山よりまゐるやとるの月

左呂

川にゆきふりふ春のまら

呉あ

ちふを盛神の花も日の中

竈上 指月

まを近り春を重なる以依

几丈

山をの窟よりまゐり昔のむし

几明

雀の跡ふすをいくもの春の子

文岳

簾戸より梅の春をふ月を祝

子賢

秋のねやまの位の候くあふ

米沢 白史

ね様や冷くくゆふ天津木二

疎竹

ねのふくや麻の蓬のむすり

乙貞

白梅より別をまゐる山をり

柳々

草の根も秋はくも色も色 叫海寺

朱沢 乙塙

春ハ老キテ秋ニ至リ人ハ老テ老キテ
信ズルコトハ色ニ至リ又

年々老實と云ふ事あり汝も老實と

飛峯

何見ても動のこゆる春日

秋田 金三

秋の風もやのよをもふくむ秋の風

倉和

秋の世春の世の中も色も色

崔命

秋の花は是も風は吹くも

如測

黄鳥の老もあつらひも

奥沢 川原

春の節の小もも秋の葉もも

奥沢 芳吉

夕野の多し 紫ももみ子の家

ツカロ 多代女

芦の葉もをよるも刻くも

秋 虚白

撫庭とてふも色の回も

秋 杓谷

花もかきとて人の影も

江戸 菜場

何ぞ鳥の何ぞははらと秋の物

曉河

垣もよる春もよる寺も

椿 辛雄

こゝろ秋も吹くも風の海も

文貫

家浪をねのるも見ても春の海

芦菴

川中やもみ秋の葉もかき

九朴

多岐行平 聖きまむねのむらじの雁

江戸 ちとせ

黄鳥の初見まゝの二月の風

ふあ

あし路も人ふきつたあつた

女 周末

一編一集の定めありきふは
卯月一日あり

今一降きあは花見に衣まぬ程

孤山

嬉しきものちを引ひ茂るあけ

碩高

墨田川ふねありも花のたけく

左節

まろ雁の泊るるまじり

鶯笠

草枕春あけのやうな虫の糸

芭蕉

ふらふら中のおもむくは流の留

日の雨旅のあつたあつた

碓嶺

襟の中はまろの斗や復のむね

護拙

月を何年か地震のやうに茂る風

豊前 一宵

あふふかえくしりあふあふ

成美

初年や千代のちとりの復しの浦

泉兆

雪あふくしくな袖を原の月

道彦

下の房ももろ一村を梅はくあ

南部 和香

春の雪その風と上舞の具えそし降

平角

三葉の香は秋のよほふ山家也

南部 丹枝

菊代の秋や中をまきとく子の花

林雀

花や森と起す梅の本るは

珍平

夜あぢや夜も書連のかり坐敷

東瑠

浮森る人へては平はあそ

寛非

寂しさを嘆重くふまふ米代

常只 眠石

石梅やふ目る燈の身ふる子と

信只 雲山

雄の書も陰りり年一の女

朱沢 雲牛

きふの月後世はふまはふあり急

玉之

行里や後平不しき月の雲

涼歩

何そ鳥の烟う後へおまの花

駒章

結そ出ふ月も浮生の十おね

指丸

何そ鳥のあさ鳥色や目おなり色

宇考

素素堂叟の判詞や曰はり是非を解く人
惟是非の肉を出し是此是非の非を去る也
普天下の作者も此の事をも思ふ事今幸
已知の秋葉月出明のころや丹を印を度て
采沢り止ふ事累月時あそて不ト叟の
選集續の系を再興——又此時や何の系
作者の句を拾ひて人の句をも撰る事

續けし文の原と早くもて樟子よき事
是全終きこる後を師とすふの心こ我
は是山の内を出し鳴呼非多し

あゝ花をよつらぬ心の跡とまじし
碓嶺

散憂りかえりて嘆日をも花の夏
碓嶺

蝶の金糸一結ふ草の戸
雄島

青海苔の白ひふさぎぬ春立て
嶺

人呼ぶ声の浪ふ映ふ
島

今終く一月の終り源し
嶺

折るくおしむ花子の色
島

小径の縫を縫う返ふこ
嶺

恨を留りたりくと吹
島

来ん世りへ頂戸の海士とも扇まじし
嶺

雲の道あま垣のあき鳥
島

引分り跡の名跡の旅舟意
嶺

月を降りて霞中より紅
嶺

一昨日のまぶしの奥ふ身を位て
島

大工の杖杵をばり僧達

嶺

時くハて流る院ふろの海

島

暮ふ万のちき山の端

嶺

七種もあゝぬり梅の散出

島

飯くふ外ハ凡中の系とふ

嶺

馬呂寺を跡あゝふむ約事年

李堆

船の日帳の合もぬ照降

嶺

甕をふ運くし燈を是もやり

堆

母のあは子のうへ何れ中日

嶺

あかちて埃を流りきり止

堆

河原の院のうへりりをも

嶺

うまのくハ月見ふ秋もさほく

堆

えの糸と虫とあちやふ

嶺

名物の梨を二のり割るて

堆

文ハハ條弓の恵るそり

堆

あゝともの目とけを波重祐

嶺

附るも終くて雪の降年

堆

道やま走ふ何れも志登の里

嶺

聖とてきふ日をさげぬ西雀

雀

くしと二の百の客ハ立きたり

嶺

くふの雲の足えふ来ふ

堆

くやふ雲もむの種もあし

嶺

安積の田子 不き枝るは

堆

...

咲幸夫くき行 畜の能くゆふ

飛岑

母子の草と鳥の餅ふはむ

折之

杖筵の上も雛の耕もむ

確嶺

風の音も 風の音も

岑

ちく唐の声ふる月宵の月

折

歌の種をぬきし 西武

嶺

洛外をせ秋す 存ふ並 回り

岑

くしゆりもく 鏡をひきふ

折

鏡も埃のふやふ 圃の戸す

嶺

黒 髪 山あそや なりぬふ

岑

忍冬のをも散す 雲のあそ

折

僧もあそ子の名を隠す月

嶺

身一町の秋を去るる秋を去る

岩

春の墨も流るる又心

柳

折ふたふもを返るる走る

岩

信をいませり人を結

岩

信佛の別ををるる花の中

柳

折るの年折るはく山吹

岩

但更の冬をく年の去る春

岩

と縫ををるる秋を葉の戸

柳

去橋をいぐる結を結

岩

夕の旭々晴くく

岩

見ぬ意に加田の渚るる浪や

柳

憂事けも不線香の灰

岩

山雀もいふ不草ら枕もと

岩

菽を一つりて紫花むさく

柳

一村の夏名月も是なりり

岩

焚火を焚ふれを毛も

岩

大鑑層の山へ龍を返ひ上て

柳

滝ハ城をさるる仲立

岩

行雲可蔵のうらを引出せ

岩

六 弥生もくくあく二十ハ日

折

采川岸の塵もも采亦掃ちきり

嶺

一 花の吹雪の肩こゆふ声

岩

賣 跡ふさる一人形も世亦何を

折

山 事ふ竜やこめをるの中宿

筆

山 事ふ竜やこめをるの中宿

筆

山 事ふ竜やこめをるの中宿

筆

山 事ふ竜やこめをるの中宿

筆

追加

人ハ皆何をましつらむ春の雁

古歌

おのゝすよかえぬまきや泣のえる

一 舌骨も肉のつらあり梅柳

松徑

おと待ん柳見まきまて仏の目

乙韻

視のけり中し病ぬけや梅椿

乙塙

やま候の足えさふ一海不方

曉花

稚子ゆや山路の草亦春動く

木松月

十六并言

雲の千 花の海とむきそあく性 テハ二井宿 音羽女

山の井の庵中をそよ風のそよ風 湯香女

花千初 履をききあはせ月 崎山

花のまはれ 井の庵のそよ風 月 吳山

黄のまはれ 井の庵のそよ風 月 又河

旅百里のまはれ 井の庵のそよ風 月 杜明

身氣のまはれ 井の庵のそよ風 月 乙二

赤湯の里の寺

枯草や つもふ月日の眼千ふふ 雄嶺

出羽のくまの青を遠く

あはれ根がさきさの節 雪かき

雪の日の中 篠の上中を松葉をかき 後二 朱沢

織をたれ 衣をぬきそのを月まき 相鳥

森のまはれ 井の庵のそよ風 月 梅亭

初春の中 鳥鴨をそよ風 月 世行 一ノ実

かきもそよ風 井の庵のそよ風 月 几隠 ハコタテ

世の中 雀のめけ目をそよ風 月 布席 信及

衣くも 思ひをそよ風 月 何丸 ハコタテ

雪染ふくゆき若袖を古の上
信及 呂吹

なやゆ月ハなほ初の上を引
上及 舞因

山雲の事ハ物ハツの迎春さあそ
舞丸

廣き心より深きをぬき旅の宿
秋田 仙崎

なぬハさハ口よりさまぬ月夜式
眉長

雁々初を今宵ハく衣を初言ハ海邊
厄言

痛書あり見舟よりあそふ若まはるあ
尋風

筆草お友のうそく物ハつたそ
江戸 伯夫

木や草の風や雨やまを結つてあ

源仏ハ病中梨子好く好き道ハ

梨をむく隙ぬき道ハ袖の雲
應く

十月六日ハ金全仏の忌日ナリ道也ハ

公孫忌も道もか菴の六日の御

雪境をのさるの浦子初ハ中ハか
道彦

苗さあ田さの僧の衣をさす

些三句ハ病中の作也

出羽のくみ二并宿りて

見ふふりハ雪まはあそハ辛夷さく
碓嶺

病中

天切をそよぶの夕をほくくえ 李堆

葉や初人ふほきまらて葉の秋 山水

草の中やまきき芳野の春を待 志業

月かきそふむ進まらば梅のち 幸久

昼色の春や居まらば田あけ 桂路

山の雪の平まきり尾もまの初 亀崎

雪のそよぶ雪の来日やまの初 东白

辛夷さくらもさふ見えなく春の隙 雄島



